論潮

国民春闘の破綻　安田信治
ささやかな提案 ― サンジカリズムの検討 ―　宮崎晃
書評『戦後アナキズム運動試論』　奥沢邦成
映画評『新・仁義なき戦い』　山上春彦

&&&&&&&&&&&

国民春闘の破綻

奥沢邦成

&&&&&&&&&&&

不況からの脱出に苦慮する日本経済の現状が、低成長・安定成長経済を主張するなかで闘かわれた七六年春闘は終結した。

結果的には、昨年に続く敗北として総括されよう。賃上げでは、日経連の「ゼロまたは一ケタ以内の賃上げ」というガイドゾーンにおさえ込まれたし、昨年来の懸案であった制度要求も空手形のままに政府の強硬態度の前にもろくも屈せざるを得なかった。

〈賃上げ〉これまで春闘の成果として考えられてきた賃上げの「高位平準化」の役割り、それによって賃金の社会的相場を確定し、結果として賃金の企業間格差を縮めてきたことが、実は春闘に結集した労働組合の闘いによる成果であるよりも、基本的には高度経済成長下に企業と資本とによって許容された獲得物でしかなかったことを、昨年および今年の春闘は如実に物語っている。数字は、六七年以来小幅であった賃上げ額の分散係数（格差の幅）が、七五年には再び六五年以前の水準にもどったことを示している。

換言するなら、それは日経連が主張した「賃上げは各企業の支払能力に応じて」、つまり出せるところは出すし、出せないところは出さないという行き方の具体的な現われなのである。かつての大幅賃上げが、実は経済の高度成長が企業にもたらした超過利潤の小さな分け前にすぎなかったこと、決して資本なり企業を社会的に譲歩させる闘争力を労働者がつみあげてきた結果ではなかったことが、今や歴然としてきたのである。

〈国民春闘〉七四年に弱者救済のスローガンを掲げて国民春闘が登場したとき、われわれは真に連帯しようとする労働者の闘争が、何故に弱者・救済という表現をとるのかを批判した。そこには大企業・官公庁を中心とした既成労組の明らかな思いあがりと高慢さが顔をのぞかせており、体制に追従し特権階層と化した組織労働者の内実を容易に読みとることができた。しかし、昨今の経済状勢はそのベールを一朝にして剝ぎ取った。

国民春闘の基調としての生活闘争が前面に主張された昨年の春闘には、不況下に大幅賃上げは望めず、それに代わるものとして強く推し出された全国一律を含む最低賃金制、労働基本権（公労協のスト権）の承認、雇用保障、インフレの抑制、および年金などの社会的権利・保障の制度化などの要求があった。

しかしこれらの制度要求も、すべて継続交渉の形のままに、実質的には反故とされた。

こうした経緯をもって、春闘と既成労組の運動を批判することは容易であろうが、ここでは控えたい。ただ、これまでの春闘の内実と運動の体質そのものに対する徹底した自省を要望したいと思う。ここでは、国民春闘＝生活闘争にうかがえる注目し得る転換に眼を向けたい。それは、労働者の生活を安定化し向上させるための社会的権利の制度化を主眼とした闘争が、社会的な闘争なるが故に企業の枠を越えたものになり得るし、また企業別組合の枠を脱した広範な労働戦線への方向を内包しているからである。もちろん手離しの支持ではない。期待し得る内容をもつということである。

〈賃金自粛論批判〉前項での期待は決して事態を甘く評価していることにはつながらない。それらはより可能性を孕んでいる部分であって、大勢には徹底した批判の対象とされるべきいくつかの考え方が今春闘で表明されている。その一つは賃金自粛論である。これは、日経連の論理そのものの労働者版であって、賃上げに対する企業の支払能力論の労働者側からの表現でもある。われわれの基本的主張は、経済活動の社会性に依拠するのであって、個別資本の利潤に対する分け前要求ではなく、経済活動のもたらす利益の社会的配分の要求であり、労働権の確立である。

自粛論の発想には、企業の収益や生産性に合わせて自己規制するといった思考と行動がはっきりと出ている。また経営側も、労働組合の社会的責任を述べ、自粛を促す。しかし労働組合の社会的責任を問うなら、それは経営側にではなく、広範な労働者階級のより社会的な存在に向けられるべきである。同じ発想は、社会契約的春闘論にも見られた。低成長下の労組は実質賃金の確保を追求するが製品コストに影響するような大幅賃上げは抑制する。こうした賃金率や社会保障などについて、政府・資本・労働の三者の話し合いを通じて決定していこうとする考え方であり、これは批判し尽さなければならない。

すでに誰の眼にも、これまでの春闘方式の破綻は明らかである。七六年はそれを最終的に宣告し、同時に労働運動が内在させてきた諸問題をきわめて特徴的に浮き彫りにした。

われわれは、既成労組の企業別組合としての性格と限界に対置して、また三分の二を占める多数の未組織労働者の存在という実践的な課題に対して、未だ不十分ながらも地域合同労組の運動を提起し主張してきたし、一尽の理論的・実践的な構築にむかうだろう。

最後に、飛鳥田一雄が国民春闘の再構築問題に関連して提案している評議会方式（五月一八日・読売）に触れておこう。それは、労組主導型に代わる社会党のイニシアチブを意図しているが、地域的な評議会の構想が出てきたことに注目したい。国民の諸階層を評議会に組織し、国民春闘に結集させようとする志向は、形式以上の内容をもって実現させることは難しいだろう。同時に、地域連合論の立場から批判を加えていかねばならない。

&&&&&&&&&&&

ささやかな提案

奥沢邦成

&&&&&&&&&&&

この小文の意図するところは、きわめて素朴なものであって、第一には、サンジカリズム（正確に言えばアミアン・サンジカリズム）は、アナキズムの戦線から、今一度、きっぱりと排除する意志表示をしたほうがよいのではないかということと、現在も使われている

アナルコサンジカリズムという用語が、かりにアナ系の労働組合を意味する用語として使われるとすれば（実際にはアナルコサンジカリズムはバケモノのように思えるが）、この際、これも国際的にアナ系労働組合を簡潔に表現する用語を統一化してはどうかという、ささやかな提案に帰する。

一　李石曽らパリグループの『新世紀』と革命の戦術

系統的にいえば、クロポトキンがジュラからジュネーヴに移って、そこで一八七九年から『レヴォルテ』を創刊、一八八五年パリに移り、ジャン・グラーヴがあとをついで、誌名も『レ・タン・ヌウヴオ』と改め、一九一四年に終焉。むろん、それは蛇足。とにかくそうしたいきさつがあって、パリ留学中のアナキストの李石曽・張静江・呉稚暉・緒民誼の諸君が、『ル・タン・ヌウヴオ』のエス語訳『ラ・テンポイ・ヌヴオ』なるアナキズム誌（週刊）を創刊したのは一九〇七年、そのあとエス語の誌名をやめて標題を『新世紀』と改め、プルードン、クロポトキン、バクーニン、マラテスタなどの論説をかかげ、中国の初期アナキズム運動に大きな影響を与えた。しかし、実際には、秘密なやりかたで中国本土に持ち込まれた『新世紀』は三百部位だったという。

師復は、実にこのパリ・グループの『新世紀』の影響を受けたのであって、彼のアナキズムは、わが国とは関係がない。師復の源流はパリ・グループである。ただし、大杉がみじかい時間、交友関係をもったことは、山鹿泰治が詳述している。

二　パリ・グループの革命論

李らは『新世紀』とは別に、小冊子の双書を出した。その第一集として一九〇七年『革命』を出版している。これはある種の革命の方法論を説いたもので、筆者は李石曽と緒民誼であろう。

『革命』は五項目をあげている。それは次に示すものである。

イ、書物と演説　ロ、群力結合　ハ、抵抗（納税・徴兵・罷工）　ニ、暗殺（ピストル、爆弾）　ホ、大衆蜂起（革命・大改革）

この他、『新世紀』には、第六号には「工会（労働組合）」、第九二号には「罷工」が紹介されるにとどまり、一九〇六年、アミアン憲章が可決され国際的に大きな影響を与えたにしては、『新世紀』への反響は少なかった。（しかし、スカラビーノは、彼の著において「工会」や「罷工」がサンジカリズムに関連するものとしてとりあげている。）

三　師復の革命論

師復ははじめ（一九〇六年）は孫文の同盟会に属し、当時留日していたが孫の広州蜂起を聞いて離日、軍閥李准を襲ったが投げる前に爆弾が破裂して彼は重傷、逮捕されて三年間獄中におり、その頃から、パリ・グループの影響を受け、同盟会からアナキズムの、辛亥革命後の、清朝の打倒には成功したが、結局、袁世凱が国家権力をにぎり、そうした状況に接した中国の進歩分子は「社会改革の成功のためには民衆の国民性の改革、個性の独立、自我の覚醒から手をつけねばならぬ」ことに気付いた。

こうした状況というものがそこにはあった。一九一二年、師復は広東に海鳴学舎（さらに民衆レベルの心社）をつくり、一九一三年から、中国社会運動史上、同時に中国アナキズム運動史上に消し去ることのできぬ大きな足跡を残した師復の運動のひとつであるアナキズム誌『民声』が創刊され、民衆の中にはいりこんだ破壊活動から建設活動のしっかりと大地を踏みしめた有名な活動が始まった。しかし、天は、彼に長い時間を与えなかった。一九一五年三月、彼は肺患で上海の印刷所のつめたい固いベッドのうえで夭折した。

師復の『晦鳴録』創刊宣言（一九一三年八月）には次の文字が掲げられている。

いま記載するものの綱要をあえて約挙すれば次のとおりである。イ、共産主義　ロ、

軍国主義反対　ハ、工団主義（サンジカリズム）　ニ、宗教主義反対　ホ、家族主義反対　ヘ、菜食主義　ト、語言統一　チ、万国大同

この革命綱領のなかに耳慣れない二、三の言葉があるが、中国の社会腐朽である賭博、売淫、遊廓、阿片、遊惰などを拒否するモラルなものを含んでいるのである。

しかし、注目すべきは、師復にも「工団主義」が列挙されたもののひとつとして掲げられているということである。そして、師復みずからか、訳者のスカルピーノの筆か、「サンジカリズム」という言葉が挿入されているということである。師復について言えば、彼の言及した工団主義の意味するものに、研究者は深く追究すべきであるが、おおむね見すごされている。

四　陳独秀のアナキズムとの対立

大ざっぱに言えば、中国社会は五・四運動（一九一九年）の時代にはいっていくのであるが、この時代を代表する北京、天津の学生三千人が天安門にスクラムを組んだとき、彼らを指導したのは、学生アナキスト区声白であった。区声白については後述しなければならないが、ここでは一応、のちに区声白と『新青年』誌上でアナキズム対コミュニズムの論争で、中国の労働者、学生に大きな影響を与えた陳独秀について要約したい。

陳独秀は一九一五年、「上海で『青年雑誌』のちの『新青年』を創刊、伝統破壊、近代的革新を青年に呼びかけ、現状の変革を望む青年に強い影響を与え」一九一七年、学長蔡元培に招かれて北京大学文科科長に就任、北京大学を新文化運動のメッカにしたことは言うまでもないが、一九一九年五・四運動のとき捕縛投獄されたが、出獄して上海に帰ったところで、コミンテルン代表のヴォイチンスキーに接近、彼の援助で中国社会主義青年団を結成、ついで一九二一年結成された中国共産党の中央委員長となる。

これに先立って、ロシア革命によって中国社会には、共産主義がヌーベルバーグの波となって、アナキズムとの間に激しい論争がおこなわれた。このとき、『新青年』によった陳独秀をむこうにまわして、激しくアナキズムをふりかざして闘ったのが、学生運動によって、全中国の労働者、学生に支持された区声白である。

五　区声白の革命方法論

区声白は一八九三年、広東省に生まれ（したがって論敵陳独秀とは一三才年下である）、前記のように、五・四運動のとき北京の学生アナキストを指導、一九二〇年卒業、広州においてアナキズム運動をつづけた。

陳独秀のアナキズム攻撃のひとつは、「アナキズムは革命を成功させる能力もなければ、革命の余じんのなかで、権力保持に成功する可能性もないということである。陳の心中には組織され集中された権力の重要性が深く根をおろしていた。革命は規律なきバラバラの集合で推進することなどはあり得ないことである。もし、革命の余じんのなかで、レーニンのプロレタリアート独裁にかわって、クロポトキンの自由連合が採用されれば、革命はたちまち資本家に奪還されるであろうとして、権力と国家を擁護し、民衆にはいちじるしい不信を抱いている点でレーニン主義者であったし、陳の今ひとつのテーマは、「中国産業を発展させ、社会主義経済を創造して、西欧に追いつくことが必要である」と信じた。陳の主張は、全くレーニンの『国家と革命』の受け売りであることはきわめて明らかである。

区声白は、陳のアナキズム空想論に対して、「サンジカリズム（工団主義）は、革命そのものの指導においても、革命後の権力維持においても、実行可能な具体的方法である」と強調した。そして「アナキズムは悪に対しては暴力をもちいることをためらわない。ただ、アナキズムは制度化された権力と法律に反対する。アナキズムの自由は気ままなそれではなく社会と無関係には存在しない」と主張した。

しかし、区声白の主張の骨子にサンジカリズムがおかれていることから眼をそらすことはできない。ここに使用されている工団主義の用語は筆者には納得がいかなかったので、この文が掲載されているスカラピーノの『中国アナキズム運動』の訳者、丸山松幸氏に区の原文について教示をもとめたところ、同氏から以下の返書を得た。氏は「サンジカリズムの中国語訳は常に工団主義とされていて、晦鳴録も区も同じである。お説のようにアナキズムとサンジカリズムの厳密な区分は、中国ではほとんど意識されておらず、むしろ、無政府社会を実現するための有力な手段としてサンジカリズムを考えているようだ。区の原文は以下のとおりである。：：所以共産的無政府主義者、多置身於工団派的運動、旦用革命的手段、以撲滅現在的制度、実現無政府主義、断不是想個人逃出社会、以実現無政府主義。」なお、丸山氏は、「現在に近代的労働運動がほとんど存在しなかった中国では、アナキズムとサンジカリズムの鋭い対立、相違は問題にならなかった」と付言されている。

（十一月六日記・未完）

六、以上が本年一月の『イオム』第十号に掲載した「ささやかな提案」と題する筆者の拙文である。論旨がはっきりしないために筆者のドグマではないかというおとがめもあるかと思うが、この拙文は未完となっているので、この機会に（『イオム』は第十号で休刊）、未完部分を補う意味で、かんたんに原稿紙十枚位加えることを許してほしい。

七、わたし自身どおかと言えば、本来のサンジカリズムについて専門的な研究をしていないし、従ってその知識もない。しかし、本来の意味での本質的なサンジカリズムと、それが一九〇六年にアミアン綱領のかたちで定型化したところのアミアン・サンジカリズムとのあいだには、微細ではあるが、その微細が、サンジカリズムとアミアン・サンジカリズムを異質のものとしてひきはなし、筆者が『イオム』第十号のさいしょに、唐突な提言「サンジカリズム（正確にはアミアン・サンジカリズム）をきっぱりとアナキズムの戦線から除去してはどおか」といったことばが出てくるのである。

八、フランスのサンジカリズムが、フランスの資本主義近代工業のめざましい発展と、そのことから必然に生じた、生活にあえぐプロレタリアートや、貧困化した農民層の、ブルジョアジーにたいする反目の大きさが、フランス社会に、サンジカリズムの原点を生む根源であったことは、決してあやまった指摘ではないであろう。

サンジカリズムはフランスで発生し、フランスでうまれた。根源的なサンジカリズムを創造した同志は、当時、フランス労働取引所連盟書記長のフェルナン・ベルーチェ（一八六八ー一九〇一）であることは、一般に言われている（ルフランなど）。ベルーチェは、かれ自身の考えを一八九五年十月二十日号の、クロポトキンの『レヴォルテ』のあとをついでパリから当時でていたジャン・グラーヴの『レ・タン・ヌウヴォ』紙に、「アナーキズムと労働組合」の題名で執筆した。ベルーチェはわずかに二十七歳のわかさであったのである。これによってベルーチェのサンジカリズムは欧州で社会化した。しかし、かれはまもなく、前述の意見をはっぴょうしてから六年後一九〇一年に病歿したが、アミアン綱領が採択されたのは、このあと五年後であり、その間、ベルーチェイズムを継承したのは、労働取引所副書記長をしており、一方では、ジャン・グラーヴの『レ・タン・ヌウヴォ』の編集をたすけていたドレザル（一八七〇ー一九四八）であった。

九、しかし、こうしたことは重要ではない。問題は、ベルーチェイズムがアミアン綱領までの五年間に、いかに変質したかということである。アミアン綱領として定型化したものこそ、われわれが排除すべきものであるから

である。

筆者は告白するが、ベルーチェもドレザルも通読していない。だから厳密に言えば発言する資格はないわけであるが、もし、筆者の理解にあやまりがあれば、その非をわびたい。しかし、ベルーチェは、その後に定型化したサンジカリズムとはニュアンスにおいてちがっていたのではないか。たとえば労働組合から思想を排除するといったようなイデオロギーはなかったのではないか。そういうふうに問題が提起されたのではない。ここにベルーチェイズムには、政治はかれらにとって有益ではないと考えている。しかし、有益でないという発想から、それではその政治とわれわれはたたかうべきかという問題が提起される。この場合、ベルーチェの立場は、政治を疎外するということである。疎外して、自律的に行為する。疎外と自律とがサンジカリズムの根源である。ベルーチェは、この点について、もっとなっとくの行く説明をしているであろう。

十、無益であるが、付言すれば、一九〇四年のブールジュ大会で、一九〇六年（明治三十九年）五月一日に、労働者が八時間以上働くのを放棄することを決定、これは絶大な反響をよんだ。この日から世界のあたらしい幕がひらかれることが信じられた。当時の回顧録によれば、すべての民衆が革命ま近しということを信じた。金のある連中は、フランスをはなれてベルギーにのがれ、パリには六万の軍隊が集結し、あらゆる場所で二十万人の労働者と警官隊が衝突し、八百人以上の労働者が逮捕されはしたが、「革命」ではなく、それは騒擾にすぎなかった。

下部の労働組合は、革命がおきたら、かれらは闘争組織から生産組織にかわり、労働取引所は生産物の分配所にかわるはずであったが、収用もなく、単なる集中からは騒擾が発生するほか、なにも起りはしないし、具体的な建設はない。このあと、CGTは約言すれば改良主義的にかたむいて行った。

十一、一九一七年三月、ロシア革命の発生とともにアナルコ・サンジカリズムの名称もまた、ロシア国内に於て復活した。しかし、名称が復活したというだけで、系統的な内容をもっているというわけではなかった。

国際的解放運動において著名なゴルドマンや、ベルクマンやシャピロなどの努力で、ロシア政府によって投獄、流刑されている数千人のアナキストのうち、きわめて少数の者が一九二〇年に追放され、かれらは亡命ロシア人の中枢地であるベルリンに到着すると、ナバトのヴォーリンやアルシノフたちは「アナキスト通報」なるアナキスト月刊紙を発行、他方、マクシモフ、ヤルチュク、シャピロたちは「労働者の道」なるサンジカリスト新聞を発行し、多数のロシア残留者の救済、ボルシェヴィキ政権の実体についてキャンペーンを開始した。しかし、かれらはアナキストとサンジカリストにはっきりと別れた。そのことについては、あまり詳しく説明するまでもなく熟知されていると思うので省略する。一九二二年十二月から翌一月にかけ、十二カ国のアナルコ・サンジカリストがベルリンにあつまり、インターナショナルを結成し、それにバクーニンの第一インターと同じ国際労働者協会（IWMA）の名称を名乗った。この人びとのうちルドルフ・ロッカーなども国際的によく知られ、かれの書いた『無政府主義と組織』は『黒色戦線』（黒色戦線社・昭和四年一月号より連載、複刻版あり）にも掲載されており、アナルコ・サンジカリストのアナキズムにたいする批判の内容がわかる。

十二、IWMAはさきに述べたように、第一インターナショナルにおけるバクーニンの宣言「労働者の解放は労働者みずからの手で」を宣言とし、アミアンのサンジカリズム綱領をIWMAの綱領とした。さきにサンジカリズムの綱領にふれたとき、その綱領を挙示すべきであったと思うが煩雑なので略する。すなわちIWMAは、一面においてバクーニン主義（アナルコ）、他面においてサンジカリ

ズムをそのままみずからの綱領とした。

石川三四郎がこれについて書いている（春秋社エンサイクロペディア第一九巻・「社会思想」サンジカリズム・昭和二年十二月発行）。「この第一回大会（前掲一九二二年十二月の）に於て決議された宣言及び綱領によると創立宣言は、第一インターにおけるバクーニンの主張、及びアミアン宣言にあらわれたCGTの主張とまったくおなじである。この第一インターナショナルは、すなわちアナルコ・サンジカリズムの名を以て世につたわる団体である」。石川の解説によって、アナルコ・サンジカリズムの団体名の出典が明白となる。それ故、正確に言うと、アナルコ・サンジカリズムなる名称の発生はIWMAの成立、すなわち一九二二年よりさかのぼることはないのである。

いずれにせよ、これにてアナルコ・サンジカリズムの主張する思想は明白である。定型的サンジカリズムを批判する以上 アナルコ・サンジカリズムについても同様の批判をあたえることが必要であり、アナルコの頭文字がついているからといって、批判の手をゆるめることはできない。

十三、組織がなければどおにもならぬと考える一派の人びとがいる。この人びとは、あたまからアナキズムには組織があってはいけないと考えているのだろう。これはバカげた考えで、アナキズムにはきわめて実用的な網状平面組織がある。しかし、次のような組織綱領をもち出した人がいる。かれの言分によれば、運動を復活するためには、政策と活動とを調整する中央執行委員会をもつアナキスト総同盟の結成が必要である。これを言い出したのはマフノの友人のアルシノフで、提案者とマフノのほかには、この提案の賛成者はなかった。しかし、こうした危惧があるとすれば、われわれが短時間で合議し、自由合意の結論を迅速に出すことに習熟しなければならぬ。また、中央執行委員会が命令を下すよりは、かれ等みずからが自己の決意で行動をもつことが必要であろう。行動をもつグループは、それは自然と拡張するであろう。IWMAに対抗するはずのこの一団は自滅した。

十四、さきにあげたIWMAは、このばあいは欧州のサンジカリスト、亡命ロシア・サンジカリストを中心とする運動であったが、この運動は中国や日本などにも影響をあたえたのである。ベルリンでIWMAが成立したのが一九二三年、それが一九二七年には、この運動は中国につたわっている。李ベイ甘の「中国アナキズム運動小史」（二）には、ちようど、この時期の動向が掲載されているようである。（二）が見付からないので、さいわいにこの時期の運動史を盧剣波が書いているので、それを引用する。

「一九二七年、上海にある民鋒連盟は、軍閥孫伝芳の圧迫とたたかいつつ、コネイ（寧）鉄路、コ杭南鉄路沿線の多数の都市に地方団体を結成しようとしている。

当時、上海には『民鐘』と『民鋒』が発行されていた。『民鋒連盟』は青年アナキスト（無政府共産主義者、アナルコ・サンジカリスト）によって組織され、ベルリンの国際労働者協会（IWMA）および、その機関紙『デル・シンジカリスト』を支持し、またAJI（無政府主義青年インター）に加盟している。連盟には農民も参加している。」

ここに見られるような、むつかしいことを言えば非常に混乱している。筆者は分類主義者ではないから、混乱のメガネをかけ、そのメガネでものを見ようとは思わぬが、アナキズムとアナルコ・サンジカリズムは、似ているが別個のものであるので、戦術的な必要からそうする必要がある場合は別として、一般的な見地からは明確な態度をとってほしい。

こうした例は、スペインに於ても、アナルコのCNTと無政府共産のFAIとが混線しているように見られる場合が少くない。これだって戦術上のことは全く問う意志はないが、みだりに混同することは反省しなければならない。

十五、スペインが出たついでに、IWMAの命運についてだが、IWMAは、一九三二年にナチの抬頭におびやかされてアムステルダムへ移動し、四年後にはCNT（サンジカリスト連合）がかつやくしているスペイン内乱の舞台、マドリードへ移り、フランコの勝利後、サンジカリスト・スエーデン労働者センターの手で維持されていたが、第二次大戦後ツールーズにうつり、そこで創立四十年ののちも存続している（アヴリッチ）。なお、その後の状況につき、平井（貞）を通じ吉葉氏、同氏を通じ三浦氏と、IWMAの近況を照会したところ、何年かまえ右翼の襲撃にあい機関紙の発行は不可能のようで、フリーダム社にアドレスをおいているとか。はっきりしたことは不明。『ディレクト・アクション』とは関係はない。現在活動しているのはAIT（AITの名をつかい各地でサンジカリストの機関紙が出ている）だ――ということである。なおAITは邦訳では国際労働者協会となる。

十六、IWMAと『全国自連』との紛擾（オーガスチン・スーシー書記長書翰に関する）については、半世紀を経過した今日、いまさらこれをむしかえすことはあるまい（全国自連複刻版・黒色青年複刻版に掲載あり）。

そうは思うが、かんたんにおさらえすることは無意味ではあるまい。ことのおこりは、第二回全国自連大会に、一九二七年十月四日、ベルリンのIWMAの書記、A・スーシーからおくられた祝辞のメッセージから問題がおこった。まずその冒頭において、かれはつぎのように述べた。「我等は全世界のサンジカリストの名に於て大会の成功を熱望し、あわせてこの大会が日本に於けるアナルコ・サンジカリスト運動に一層の発展をうながすことをいのる（中略）。我等は自由社会主義の基礎に立ち、ひとり純正アナキストのみならず、また純正サンジカリスト・及びアナルコ・サンジカリストを糾合する（中略）。同志諸君、我等はさきに日本の自由労働運動内部に於て、純正アナキストと、純正サンジカリスト間に論争あることを仄聞した。我等の意見を述べるならば、かかる問題についての討論はそのときを得ているものではない。それは全く理論的性質をおびたものである。」以下省略。

スーシーの右のメッセージに不満がもたれ、スーシーに対し私信をもって抗議したところ、かれから以下の釈明文がおくられてきた。「私信をもって」とあるのは、たしかA思想研究会の麻生義ではなかったかと思う。かれの釈明文は、A思想の機関紙『無政府主義研究』に掲載され、それが『自由連合』第二五号に転載された。この経緯は割りきれないが、それはとにかく、スーシーの釈明は以下のようなものであった。

「もし、全国自連にあてた私の手紙のなかに、日本の同志の独立の感情を阻害するような言葉があったとすれば、まったく遺憾に思うものである。なぜかなら、第一にかかる意図は決して私にはないし、第二に、IWMAは神聖なる執行機関、もしくは指導機関となることをはかっているものではぜったいにないからである（中略）。私が大会宛の手紙を書いた理由は、同志フクダが大会の開催について知らせてこられ、あわせて、かれは日本に於ける情況を知らせ、大会宛のメッセージを送るようもとめたからである。私が大会にメッセージをおくったのはこうした事情からである。なお、貴下たちの雑誌のエスペラントの部分、及び同志フクダならびにヤマガの手紙から判断して、貴国におけるサンジカリズムとアナキズムの運動が、不幸な状態にあるものと結論することができたので、ああしたメッセージをおおくりした次第である。しかし、今や、それは私共の誤解であることがわかった。私たちはアナキズムとサンジカリズムの役割の相違からくる論争であると思ったが、実は、アナキズムとマルキシズム、組合について言えば、純粋なるアナルコ・サンジカリズムと改良主義的日和見的サンジカリズムとの争いであることが明瞭になった（下

略）。」

しかし、一般的に言えば、当時の事情は、さいしょスーシーが指摘したような、アナキズムとアナルコ・サンジカリズム（IWMA）との紛糾であった。

十七、ささやかな提案にしては、中味がゴタゴタしている感があり、かんじんな点で後研をまつ点があり、すっきりとはしていないが、提案の趣旨そのものはわかってほしい。

（一九七六年五月十日）

書評

『戦後アナキズム運動試論』（久保隆著）

奥沢邦成

一　はじめに

戦後のアナキズム運動を総体として論じようとする著者の取り組みに、まず敬意を表したいと思う。出版予告に本書の標題を見つけたときから、少なからぬ期待とその実現を心待ちにしていたが、それには、おおむね次のような個人的事情があった。

ぼくがアナキズムやアナキストたちと意識的につき合い始めてから、もう七年余りになるが、その間に体験したアナキズムの現状における多くの問題が、一つには戦後アナキズム運動史というテーマ設定によって、個別にではなく全体として俯瞰できるのではないか、さらには、それらの根底に横たわるより本質的な問題が見出し得るのではないか、それらを克服するための重要な視角が得られるのではないかと考え、その仕事に二年ほど前に着手したことがある。三名のメンバーで、戦後アナキズム運動史のテーマのもとに、まず年表作成に取りかかった。年表は一応完成（本誌二号〜六号に連載）したものの、その後に予定していた補足と資料編纂などの作業は中断してしまった。断念したということではない。ただこの間に、個人的には戦後という時代的枠組みを遡って、昭和初期の運動にテーマ上の関心が移行しているという事情がある。しかしそれは、戦後アナキズム運動というテーマ設定を無意味と考えるようになったというわけでは決してなく、戦後という時代区分での運動はあくまでも独立した課題と内容をもっているという考えは、以前にも増して強くなっている。

こうした関わりが、本書への強い関心であり、その一定の成果に対する敬意でもある。率直な感想を述べると、本書の構成に対するぼくの予想はいささか的をはずしてしまった。その点、残念な気もするが、かえって異った視点と考察が提出されていて面白いと考えている。ぼくの頭の中では、運動の具体的な在り方を一方で理解すると同時に、それをアナキズムの現実（実相）に対する基本的な認識として把握することが前段の仕事として構想されている。この点は、著者と考え方を異にしていると思われる。著者は戦後の運動を七〇年を境に区分する立場をとっているように推察されるが、ぼくはその区切りを部分的にしろ認め得ない。つまり、戦後の出発から現在まで一貫した流れとして捉えているし、批判されるべき因子も同じく一貫して存在し、いささかの小部分においても、それを克服しているとは考えていないのである。従って、戦後史の多くの事例を踏えて、現在、何がどのように問題として把握される必要があるのかを整理すること、そしてそれらを今後の活動と運動を担う立場からどう批判し、克服していくのかを考察したい。これが、ぼくの構想したテーマとその概要である。

二　共通の認識と出発

まず、ぼくが一番気に入った部分の引用から始めようと思う。この引用部分の表現において、ぼくは著者の立場にもっとも近く、かつ共通の志向を読み取れるのではないかと考えている。

アナキズムが何故に、マルクス主義の対置的な位相をしかもちえなかったのかということを考えるならば、それはマルクス主義が何よりも、思想として、原理論として〈世界性〉を獲得しうるものを内在せしめていたからであり、インタナショナル史を権力的に支配してきたからでも、歴史的にアナキストを弾圧して自らを保身してきたからでもない。そしてまたアナキズムが、原理論的な確執を単に歴史的な事象に矮小化、反マルクス主義をひたすら唱和するだけにとどまり、マルクス主義を原理論的に超越していると錯覚したからに他ならない。何よりも、アナキズムがマルクス主義の思想性と論理性を感性的にしか看破しえず、超克すべき論理や原理を何も定立しなかったからである。（本書四五頁〜）

著者がくり返し指摘している点、すなわち国家や権力に対して、常に反措定としての反国家・反権力としてしか問題を提示できないといった、これまでのアナキズムが内包していた理論的脆弱性に対する批判は正当である。この点についての、著者のさまざまの現状批判に関してはとりたてて論評するまでもないだろう。現状の受け止め方から生ずる多少の差異は、この場合本質的なものではないし、その個々を論ずるについては、時と形を改めて取り上げるしかない性質のものである。

共通の認識と、そこから示唆される理論構築、原理論の定立といった課題を意識しながらも、問題の立て方と、内容提示の仕方においては、ぼくは著者とかなり異った立場と思考に立っている。その主要な点を順次取り出してみようと思う。

三　独創性の地点

著者は、日本のアナキズム思想を主要には次のような問題設定において捉えている。

日本における〈アナキズム〉思想なるものは、外来語あるいは外来思想としての位相を超克することができずに、ただひたすら、〈観念の遊泳〉とでもいうべき様態を示してきたにすぎないのである。（本書五頁〜）

日本におけるアナキズム理念あるいは運動様態が〈観念の遊泳〉でしかなかったのは、ただ直截的に西欧型革命理念を踏襲するのみであって、外在的な日本化しかできずに、日本的あるいはアジア的理念の根底な超克を当為としてなしえなかったからである。私たちにとって現在的な切実な課題はかかる内在的止揚の問題を〈国家論〉として提示せねばならないことにある。（本書三四頁）

外来思想、土着思想、あるいは土着化といった発想や思考そのものが、ぼくにはあまり意味あることとは考えられない。そこで言わんとする思想状況がない、もしくはそのような問題の立て方によって摘出しようとする思想上の要素が皆無である、認め難いというのではない。文化接触、文化の受容とその変容過程といった問題は、思想を含めて数限りなく存在するし、こうした問題の立て方と方法論も確かに存在する。ただ指摘しておきたいのは、要求されているのは思想そのものの実質、より問われるべきは思想の現在的な有効性ではないかという点である。

思想や理論的課題に関わる限り、ぼくたちはこの一点にもっと深く固執するべきではないか。外来か土着かといった基準は、その点で二次的・間接的にある事態を把握するものであって、そのような物差しは、事態から一定の距離を保てる学者・研究者・評論家といった人々の頭に置かれていればいいのであって、ぼくたちはもう少しなり振りかまわず理論上の有効性といったところで仕事をする必要があるのではないか。本当に有効であれば借物でも結構、真の有効性が仮借性と整合し

ないことが頭に入っていればいい。むしろこうした姿勢を主張したい。

実際に、外来思想、土着思想といういずれの立場に立って批判を展開し、どのようにつきつめていっても、その発想の型にとどまる限り、実効ある何ものかを生み出すに至らないことが多い。しかも、執拗にくり返されるたびに、現実の社会からますます遊離していく。こうした構図は、外来思想は何も海を越えて来るばかりではなく、時間を越えても来るものであることを暗示してはいないか。

ロシア・マルクス主義を例として考えてみるとどうなるだろう。著者は、これをロシアにとって外来思想あるいは土着化された思想のいずれに区分けするのだろうか。また、クロポトキンのアナキズム思想はロシアにとって土着思想なのだろうか。ヨーロッパ文明に対置された近代ロシアの位置を考えるならば、おそらく問題は容易に解けないのではないか。現実はしかも、ロシア革命とレーニン主義を生み出したのである。

では、外来・土着といった形で提示された問題をどう考えるのか。問題の本質は、唯一つ、思想なり理論の独創性・新機軸（オリジナリティー）として結着をつけるしかない、とぼくは考える。同時に、その意味に連なる、思想や理論の創造性と有効性を、もっと厳密に問いつめ、批判し得る資質をぼくたち自身が身につけなくてはならないように思う。

以上の考え方に立つと、幸徳秋水や大杉栄が「西欧型革命理念の日本化が可能であると考えたにすぎないのであり、思想的にはそういった水準でしかなかった」（本書二〇頁）とする著者の評価には同意できない。

確かに、現在においても有効である思想・理論的大系を幸徳や大杉は残していないし、彼らが当時において表明した内容の多くを外来思想の受け売りと評することもできる。現に大杉は、そのように自らの思想を語ってもいる。しかし、翻って考えてみると、借り物といっても、思想はそんなにも生身の人間や、社会、時代状況と切り離して成立し得るものだろうか。とするなら、その限界とともにその思想と行動とを正しく評価することをないがしろにはできない。元来、一つの評価の在り様は、評価を下す者の在り方とは無縁ではないのである。

外来・土着の問題に固執するのは、さらにそこから次のような問題が必ず出てくるからでもある。

現在、基底的に把握していかなければならないこととして、移入思想を単純に〈翻訳化〉でもない日本的心性あるいは〈日本的負性〉とでもいうべきものの観念性と実相性を日本の〈国家構造〉と〈共同性〉の位相において照らし出す必要があるともいえる。（本書二三頁）

先の引用部分にも、「日本的、アジア理念」という語句があり、ここでは「日本的心性」「日本的負性」（何故負性で正性でないのかよく分からないが、著者の思考を投影しているようでもある）として語られる思想もしくは志向の内容が、ぼくにとっては、アナキズムの「論理や原理を定立」していく上でどれほどの実質をもち得るのかという疑問がある。

それは、民俗学がもてはやされ、伝統的云々の声を聞くときに連想する「故郷志向」と重なり合う疑念に似ている。ミイラ取りがミイラの譬えではないが、そうなるとなかなか現代における理論構築に回帰できなくなるのではないか。少なくとも、こうした危険が存在することに異存はないだろう。しかしこれは、「日本的理念」とか「日本的心性」という言葉からの類推なので、著者が異る立場から自覚的に使用しているのなら、老婆心として読みすごして欲しい。

四　〈共同幻想〉について

著者は、「私たちにとって現在的な切実な課題は、かかる内在的止揚の問題を〈国家論〉として提示せねばならない」と述べる。それはまた、「共同幻想の彼岸にえがかれるもの」（本書一〇頁）と考えられている。ここでは、国家論構築という作業に対する〈共同幻想〉という概念の有効性への疑問と、吉本隆明についての若干の批評をつけ加えておこうと思う。

吉本隆明は、〈共同幻想〉を次のように説明している（本書に引用された部分より）。

〈共同幻想〉をひとびとが、現代的に社会主義的な〈国家〉と解しようと資本主義的な国家と解しようと、反体制的な共同体と解しようと、小さなサークルの共同性と解しようとまったく自由であり、自己幻想にたいして共同幻想が〈逆立〉するという原理はかわらないし、この〈逆立〉がさまざまなかたちであらわれることもかわらないのである。

厳密な検討は機会を改めるとして、次のような疑問として要約することができる。現在的な革命、変革のための理論的課題の主要な作業として著者は国家論を設定している。しかも、その作業は〈共同幻想〉という概念を不可欠のものとして基底に捉えたところで想定されているが、ぼくは〈共同幻想〉が国家論に限らず今後の理論的作業にとって、何らの有効性を持ち得ないことを主張したい。少なくとも、以上に示された著者の意図と、本書において展開されている〈共同幻想〉を軸とした論述においては十分に指摘されるだろう。

例えば、そこから権力や権力機構の問題をどう引き出せるのか。現代社会の政治や経済体制の分析のみでなく、社会の認識論として新機軸を導き出せるのか。ことの一面や一つの方向をそれは漠然と（抽象的にではなく）示唆し得るが、行為の指針としての確たる内実を何も提示できないし、そこから引き出すこともできないだろう、こうした予感がある。それは、先の説明でも示されているように、〈共同幻想〉が論理を構築するに必要な程度ほどにも限定的要素をもたない肥大化した概念であるからに他ならない。それは、現実にはきわめて便利な万能の言葉であるが、理論的そして思想的にはきわめて不毛な概念である。従って、〈共同幻想〉の彼岸に構築される国家論というものは、ぼくにとっては、いささかその実現性を疑わざるを得ないものなのである。そこからは、吉本隆明のレトリックを越えるものは生まれないだろうし、単なる祖述に終始する恐れ、あるいは言葉の呪縛に陥いるのではないかという危惧を拭えない。

次に、著者がかなり傾倒している吉本隆明に対する私見を添えておこうと思う。というのは、著者と違った意味で吉本隆明に対する必要が、簡潔に言うなら一刻も早く論破する必要があると思うからである。

吉本隆明を戦後思想史の流れのなかで捉えるならば、昭和マルクス主義の潮流と、その後にくる思想との緩衝地帯に位置している。すなわち、前者に関してはマルクス主義離れ、マルクス主義からの離脱のための思想的苦闘を強いられたという時代状況を負わされた思想家ということである。では他方、後者に対して、つまりマルクス主義的潮流の後にくる思想に対してどれだけ寄与するかはもちろん未知数である。しかし、六〇年代の活動とそこで得た方法や志向から帰結するもの、それらの思索や思想および理論上の基礎からは、今後において多くを生み出すことはないだろうと考える。

ここで述べた〈共同幻想〉論に対する評価と、吉本隆明の思想については、粗略さを覚悟のうえで書いた。もちろん機会を改めて論じたいのであるが、著者の意見も聞きたいところである。

五　アナキズム運動への視角

本書で取りあげられている戦後のアナキズム運動および不可欠な時代思想を、構成に従って列記してみよう。

一章　ベトナム反戦直接行動委、背叛社
二章　六〇年安保（吉本隆明・谷川雁）、自立学校、日韓闘争と東京行動戦線
三章　日本アナキスト連盟、アナキスト・クラブ
四章　タナトス社、ギロチン社、ネビース

社、麦社、CSL（自由社会主義評議会ー準）、その他。

個別の活動なり運動の取りあげ方に示された著者の立場と、批判の方法を検討することにしよう。大雑把に言うなら、まず論証する対象が二つに分けられているように思う。語るに足りないとされるアナ連や麦社などが一方にあり、これらに対しては全面的に批判的言葉が投げかけられる。他方は、背叛社やタナトス社などの流れであり、これらの活動は著者によって一定程度の評価すべき対象として並べられている。これらの活動は、その意義を評価指摘されながらも、それが内包した限界性の故にもちろん批判を免れることはない。こうしたアナキズム運動に対する以上の論述から、二、三の問題点を次に述べていくことにしよう。

運動に対する著者の特徴的な視点は、例えば「戦後アナキズム運動が、べ反委の軍需工場襲撃闘争と、背叛社運動の二極点に表出していることに疑念をはさむ余地はない」と、いうところに見出せる。しかし、この二つの運動、そしてそれに続くとされるタナトス社、ギロチン社などの批判をみても、それらの個別批判を貫ぬく基本的な姿勢なり、理論的立場とその内容が十分に出されていない（少なくとも読みとれない）。そのために、一つひとつの批判が、その場限りの批判として脈絡をもたず、全体としては平面的な印象をしか残さない嫌いがある。

また、すでに触れた点でもあるが、戦後の運動を七〇年を一つの契機として捉える著者の立場（背叛社以降という区分）は、日本のアナキズム運動が抱え込んできた問題の核心に迫り、展望を切り開く上で十分に有効か否かを改めて提出しておきたい。それは、本書での運動論が、全体としては戦後の運動総体を越え得る視点なり地歩を獲得していないこと、その核心に十分迫り得ていないという、ぼくの基本的な評価の論拠とも結び付いている。

それはきわめて単純な認識に拠っている。戦後のアナキズム運動を二つの潮流に大別することはそれなりの根拠があり、ぼくも同意する。しかし運動総体に対する批判は、そのいずれの立場に批判者が身を置いていようとも、一方による他方の批判では問題の本質へと迫り得ないということである。二者択一による、他方への批判だけでは達成できないというのが、ぼくのアナキズム運動論に対する基本的な姿勢である。自己と自らが属する部分をも含めた批判でない限り、それは真の有効性をもち得ない。何故なら、両者は、個別の表情と流れを示しつつも、その根底においては一つの複合と化しているからである。それほどに問題は根深い。必要とされるのは、個別を貫いた根底に視点をはっきりと定めることである。

だから、著者が七〇年に一線を引こうとすることも、全く同じ理由によって批判される。二つの流れが空間的区分であるなら、これは運動を時間的に断ち切るという、全く同じ発想に他ならないからである。そして著者が次のように語るとき、ぼくはそれを不満に思う。

アナ連解散後、彼らのアナキズムが明確に、いわば〈公許的〉な脱イデオロギー思想として市民権をもっていくという〈情況性〉を生みだしていったのは、戦後のアナキズムの一つの決定的な末路である。しかし〈アナキズム〉が、思想的な世界性を獲得すべく飛翔していったのは、：：激越な反権力闘争を展開した〈背叛社〉以降であるといえる。：：戦後のアナキズム運動は、七〇年以後にしてはじめて、その〈負性〉の超克を現実的になしえようとしていったのだといえる。旧態依然とした公許アナキズムとは完全に訣別したところにおいて――。

（本書一四四頁）

本当に訣別し得たと言い切れるのなら、大変なハッピー・アナキストだと思う。また、そうした志向が、過去のアナキズム思想が単なる反措定を脱し得なかったとする著者との共通認識を悪用するならば、反―アナ連、反―大沢正道と重なり合わないことを期待する他

ないように思う。

より大きな思想の潮流においては、公許アナキズムであろうとなかろうと、そんなことは大した意味をもち得ない。もしアナキズムにこだわるなら、それは少なくとも他の思想潮流と対峙し得る次元で論じられねば、何の役にも立たない。その意味では、どこに居ようと、どこに属そうと同じ穴のムジナであるとぼくは思っている。そんなところで批判し合っていても、状況が変わるわけではなく、もう少し背伸びした見方をしないと窒息するというのが、ぼくの気持ちである。

誰しも、自己を置かれた現実から引き離して、高見に立つことはできない。まして、そこからの批判や発言が、何らかの有効性をもつとは信じられないのである。

（北冬書房　一二〇〇円）

映画評

『新・仁義なき戦いー組長最後の日』

山上春彦

ゴールデンウィーク封切りの日本映画には同時期の洋画に比べて映画としての魅力のある作品が見当らなかったのだが、東映がヤクザ映画路線から撤退するという声がちらほらする中で、最後のヤクザ映画と称して「新・仁義なき戦いー組長最後の日」が公開された。これまで長年のつきあいということもあって見物に出かけてみた。

洋高邦低ということで日本映画の斜陽化が昨年に至って更に際立ってきている折でもあり、また「カッコーの巣の上で」「風とライオン」「ル・ジタン」等々の洋画評判作と競合しているというので、大した観客動員力ではあるまいと思っていたのだが、そこはやはり「寅さん」シリーズと並ぶ日本映画の三割打者の貫録で、結構場内は満員になっていた。桜田淳子の「白い少女」や山口百恵の「エデンの海」が同時期公開ということであってみれば、日本映画の中ではこの時期唯一の映画らしい魅力を持った作品だろうという期待が、私だけでなく他の観客にもあったのかも知れない。

思えば、東映のヤクザ映画路線も長く続いたものである。マキノ雅弘、加藤泰あるいは鶴田浩二、高倉健に代表される前半期の任侠美学的路線から若山富三郎、梅宮辰夫らが活躍した過渡的な暴力至上主義的路線を経て、「斬られの与太」「まむしの兄弟」のシリーズで主役の地位を確保した菅原文太をスターダムにのしあげた現在の実録もの路線までということで、ほとんど十年は私もつきあってきている。この作品はシリーズ第八作目ということだが、七作目の「組長の首」を見逃しているのみで、あとは各二回平均見てきた計算になる。

なぜそんなに見続けてきたのかといえば面白いからというしかない（今や、この言葉を、「面白かったから」と過去形にすべき時かも知れない）。確かに、前期美学派路線と後期実録派路線とでは、異質な面が多いのだが、ヤクザに素材を採るかぎりにおいて、暴力をどう扱うのかの処理の仕方は別としても、観客の暴力へのあこがれの代償であることに相違はない。ヤクザ映画の魅力の第一点が暴力であることは疑いを容れない。相対的にではあれ、被抑圧者側（私たちはこれを正義と視る）の直接的な暴力が、相対的な抑圧する側（私たちはこれを収奪者と視る）の排除に成功するということ、成功しないまでも自己の肉体が粉砕するまで暴力によって抑圧機構を排除しようと試みること、このことが私たちの中の潜在的な暴力（正義の行使としての暴

力とでも云うべきなのか）への憧景をくすぐる快感が、ヤクザ映画の魅力であるといえるだろう。しかもそれが、組織対組織、組織対個人、そして組織との関わりの中での個人対個人という、私たちの日常の葛藤と同じ次元でのせめぎ合いの中から生まれてくる暴力だというのだから、これは相当に魅力的なものになってしまうわけだ。ヤクザ映画の第二の魅力は、この組織と個人との関係の描写にある。この点では、前期美学派路線と後期実録派路線では、明らかに重点の置き方が異っているのだが、ここでは東映ヤクザ映画の下手くそな総括をすることが目的ではないので、詳説することは省略しておく。

ともあれ、「仁義なき戦い」シリーズが一定の観客動員力を持つに至ったのは、映画としてのテクニック（カメラ、ナレーション、音楽も含めて）が卓抜だったからというだけではなく、何よりも組織についての視点が相当のリアリティを持っていたことによるだろう。組長が、あるいは各組員が自己の所属する組織をそれぞれどれほど違った位相で把えているのか、自己保身と組織性のテンビンの目盛をどう読みたがっているのかを、このシリーズほどシニカルに、かつリアルに描写しえたヤクザ映画はあるまい。

しかし、である。第八作目においてついにこの路線も破綻したかに見える。リアリティが、現実へのインパクトが、全然迫力のないものになってしまっているとしか思えないのだ。深作欣二の作品らしいところは、唯一ラストシーンのみで、その他の部分は完全なマンネリズムに陥っているとしか見ることができないのだ。

ラストシーンはこうである。関西最大の暴力団組長を、自分の属していた組長の仇として襲って失敗し負傷して警察の監視下に入院していた菅原文太が、そこを脱出して病気で寝込んでいる相手の組長を再度襲撃して撃ち果してバクられる。護送の車に乗せられようとしている文太のまわりには相手方の組員ばかりでなく、文太の親分が属していた上部組織の親分衆たち、当の関西系暴力団に対抗しようとして逆に先制攻撃を食って一挙に保身のため関西系暴力団と手打ちをして平穏に事をのりきろうと画策し、文太を排除した親分衆たちの当惑した顔も見える。その時、警戒する警官たちを出しぬいてパトカーの屋根に飛びのり、文太を拳銃で射撃したチンピラがいる。彼は即座に警官に取り押えられるのだが、「ワイがやったんやでえ」と男を売り込むことに余念がなく、周囲の誰彼は安堵したように「ようやった」とチンピラをたたえる。

この作品は、このシーンがなかったら、前期美学派的路線かまたは暴力至上主義的路線への回帰として見えない。文太にせよ和田浩二にせよ、数々の親分衆やその他の子分衆たちにせよ、組織の中での人間としての揺れが少ないし、揺れてもすぐに揺れるとそれ以前に判ってしまう。特に重要である文太、和田、そして各組織は、最初から成長を終えたもの、動かないものとして描かれている。高倉健、鶴田浩二、藤純子などの描き方と同一になっているのだ。このブレ、人間らしさを描くところにこのシリーズの面白さがあったのだと気づいたのは、この作品がそれを放棄したために遅ればせながら気づいたことなのだが、つくづく東映はやはりヤクザ映画から撤退して、「実録日本共産党」でも撮ればよかろうという気がしたのも事実である。人間と組織を描いてあれほど面白く観客を楽しませた東映＝深作ならば、日共は恰好の素材であると思われるし、何よりももう、ヤクザ映画は、暴力の側か生活の側へあと一歩踏みこまない限り面白くは作れないだろうと思われる。深作はパターン化したヤクザ美学派路線を、自己保身の醜悪さを描くことによってのりこえはしたものの、そうすることによって描きうるのは現実感であってロマンではなかったのだから、その手法を繰り返すことは美的完成に近づくことではなく、単純なマンネリズムに陥いることになる。これを現在の視点、素材、手法で突破することは余り期待できそうもないと思うのは早計だろうか。（六六頁へつづく）

＜プロ独神話の崩壊1＞

新しい革命観の構想・問題提起として

奥沢邦成

はじめに

今年の一月にスペイン共産党は、党綱領として「プロレタリアートの独裁」を放棄する旨を最終的に宣言した。さらに翌二月には、フランス共産党が二二回大会で同様にプロ独を放棄し、すでに独自の政治路線を提唱してきたイタリア共産党とともに、プロ独に象徴されたロシア・中国・東欧型の革命とは異る西欧型共産主義の政治路線を公然と歩み始めることになった。

日本の場合をも含めて、七〇年代に入って顕著となった先進資本主義諸国における各国共産党のこのような動向は、決して新しいものではない。それはすでに内部的に進行していた事態の公然化もしくは確認にすぎないといえる。その端初は、スターリン批判（一九五六年）に求められるし、六〇年代には、モスクワと密接な関係を保持しつづけていたフランス共産党の機関紙『コマニテ』に、「単一政党の存在が社会主義への必要条件であるとする考えは放棄している」（一九六四年）という一節が見られるという。それはまた、六〇年代に進行した資本主義諸国での高度経済成長がもたらした政治と社会の構造的変化が、各国共産党の路線変更を確たるものにし、モスクワのドグマを放棄する途を選択せしめたとも言えるだろう。従って、プロ独の放棄は、各国の共産党にとっては以上の諸変化の確認であり、同時に独自の共産主義とその政治路線の出発を意味している。（しかし今のところ、単なる路線変更と綱領の手直しでしかなく、社会主義および共産主義の核となる思想上の問題は何一つ提出されていない。）

次に、プロ独放棄と、新しい政治路線の提唱などの動きをおおまかに追ったうえで、そこに現われてきた問題を抽出していくことにしたい。

＜日本＞　一九七一年一月にプロレタリアートの「独裁」という訳語が不適当であるという意見が宮本顕治によって提起された。七三年の二月にはディクタツーラ（独裁）に対し、執政あるいは執権という訳語が適切であるとの見解が出され、十一月の十二回党大会で「プロレタリアートの執権」に改められた。今年三月には「プロレタリアートの執権」という用語自体を党綱領に残すことが必要か否かを検討して